



年 組 名前

# 道新ワークシート

## 24年ぶり円安水準 / 世界的穀物高騰

# 輸入頼みリスク露呈

### ホクレン飼料値上げ

ホクレンが24日発表した7〜9月期の配合飼料価格が前期（4〜6月）比で1トあたり平均1万1400円増と過去最大の値上げとなったのは、記録的な円安に加え、原料のトウモロコシなど穀物相場の世界的な高騰が直撃したためだ。今月から原料高騰で平均78・5%値上げされた化学肥料に続き、営農資材の多くを輸入に頼るリスクが浮き彫りになった。「日本の食糧基地」を自認する道内農業は、かつてない危機に直面している。

（堀田昭一、芝垣なの香、森川純）

## 肥料に続き道内農業打撃

養豚が盛んな渡島管内森町。年間2万1千頭を出荷し、ブランドの「ひこま豚」を道内外で販売している道

南アグロの日浅順一社長（48）は、今回の価格引き上げについて「死活問題だ」と語気を強める。

### ■自給率12%

飼料費はこの2年で月2700万円から4140万円と1・5倍になった。生産者と国、飼料メーカーで基金に積み立てる「配合飼料価格安定制度」で穴埋めしても負担は月600万円増えた。7月以降は1千万円程度に膨らむといい、日浅社長は「ゴールが見えない」と漏らす。

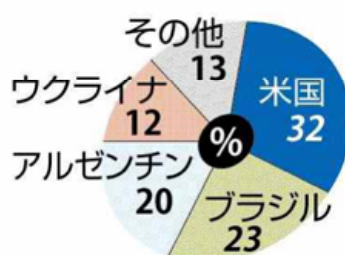
豚や牛、鶏に与えられる栄養価が高いエサは「濃厚飼料」と呼ばれる。トウモロコシや油を搾った後の大豆が代表的で、これらをバランス良く組み合わせたものが配合飼料だ。農林水産省の統計によると、濃厚飼料の自給率は2020年度で12%。ほぼ9割を米やブラジル、中国などから輸入している。

今回の飼料高騰は、1ドル1135円前後という24年ぶりの円安水準で輸入価格が押し上げられたことが直接の要因だ。ホクレンによるとさらに、世界有数の穀物輸出国であるウクライナ情勢の不安定化、新型コロナウイルス禍による食用油の需要減と中国の大豆かす生産の減少、原油高騰に伴う海上運賃の上昇などが複雑に絡み合っており起きている。

ホクレンは値上げ前後の配合飼料価格を明らかにしていないが、配合飼料供給安定機構（東京）が各メーカーに聞き取ってまとめている工場売り渡し価格によると、今年4月時点で1トあたり平均8万8569円と、2年前から3割以上高くなっていた。道内でも7月から同10万円前後と前期比1割増になるとみられ、この高止まりが続けば畜産農家が相次いで経営危機に陥りかねない状況だ。

今後について、ホクレンは「為替レートと（日本の）輸入量の7割を占める）米国のトウモロコシの作況次第だ」と説明。先行きはなお見通せない。

トウモロコシの主な輸出国



※いずれも2021年度、農水省の資料より作成

日本のトウモロコシの輸入先





年 組 名前

---

# 道新のワークシート

①円安に当てはまるものをア～エからすべて選びなさい。

- ア 1ドル=100円が1ドル90円と円の価値が変動した
- イ 1ドル=100円が1ドル130円と円の価値が変動した
- ウ 円安は、輸出が中心の日本の企業には有利である
- エ 円安は、輸出が中心の日本の企業には不利である

②なぜ飼料の高騰が起こっているのか、原因を円安以外で2つ書きなさい。

- ・
- ・

③飼料の高騰によって、私たちの生活にはどのような影響があるか、書きなさい。